

43164
教科書文庫

5
8/0
34-1947
01304 49571

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

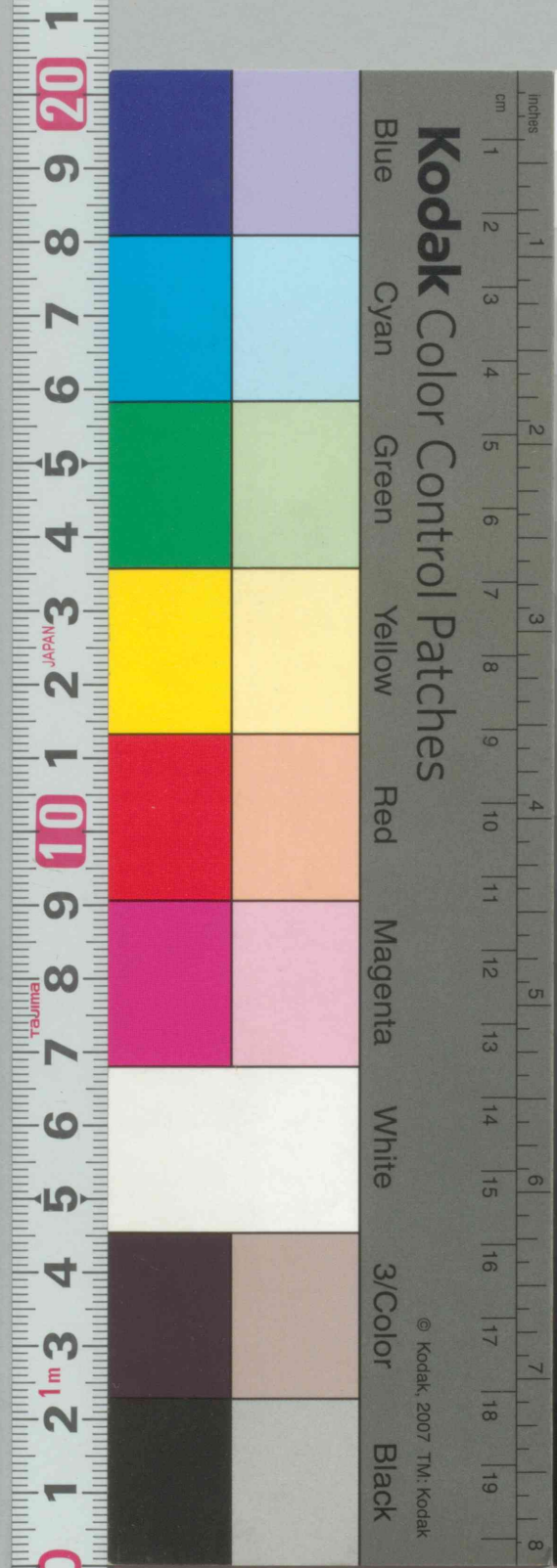


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教資



國

語

第六學年

上



教資

國
語

第六学年

上



中央図書館

広島大学図書

0130449571



もくろく

一 しずかな午前……………四

二 眞理……………八

知識と迷信
ガリレオ

三 みどりの野……………十七

四 ホートン風景……………二十六

五 電話……………三十七

六 そよ風……………四十六

土

チューリップ

しか

きり

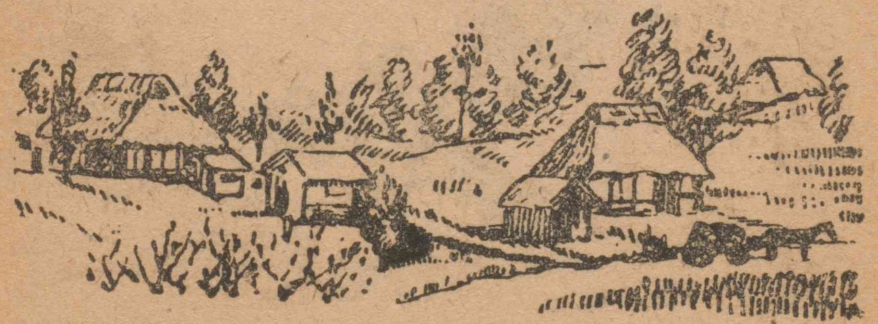
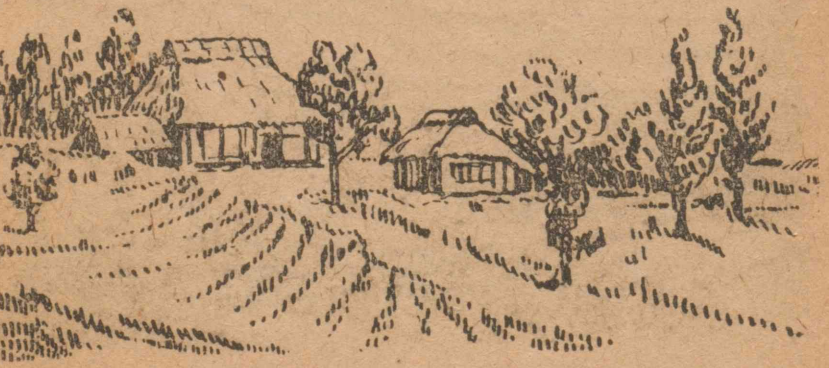
短日

わらいの歌

牧場

わたしの心はにじを見るとおどる

七 ある画像……………五十三



一 　しずかな午前

ごらん、まだこのかれ木のままの、高い
けやきのこずえの方を。

そのこずえの、細い、細い小枝のあみ目
の先にも、

はやふつくらと、季節の命はわきあがって、
まるで、息をこらしてしずかにしている、
子どもたちのむれのように。

その、まだ目にもとまらぬ、小さな木の

めのむれは、

おたがいにひじをつつきあって、ことば
のないかれらのことばで、なにごとか、
ささやきかわしているけはい。

春は、はや、しばふに落ちかかる木もれ
日のしま目もようにもちらちらとして、
あさい水には、あしのめがすすくすと、
するどい角をのぞかせた。

長くかなしみにしずんだものにも、

春は、希望の帰ってくるとき。

新しい勇氣や空想をもって、

春は、また、楽しい船出のほぬのを、高



くかかげる季節。
ひばりやつばめも、やがて、遠い國から
ここに帰って来て、
私たちの頭上にとびかい、歌うだろう。
すみれ、たんぽぽ、わらびや、ふきや、
たけのこや、
ちようや、はち、へびや、とかげや、青
がえる。
やがて、かれらもせいぞろいして、か
げろうのたいまつをたいて、おしよせて来る。
ああ、そのさかんな春のきざしは、よも
にあらわれて、



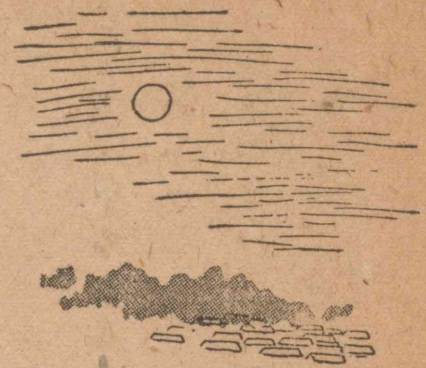
目に見えぬかすみのようにたなびいている、のどかな午前。
どこもしれぬ方角の、遠い、はるかな空のおくて、鳴いて
いるからすの声も、
ほんとうにのんびりとして、ゆめのように、真理のように、
白雲をかたにまとった小山をめぐって、聞えてくる。
ああ、季節のこういうのどかなとき、
こういうしずかな午前にあつて考える、

— 人生よ、長くそこにあれ。 —



二 真理

知識と迷信



知識は、人から教えられたり、自分で本を読んだり、考えたり、調べたりして、しだいにましていく。一人まえの人として、自分のつとめをはたしていくために、知識をますことは、たいせつなことがらである。知識には、浅いものと深いものがあるが、その深く進んだものを科学的知識という。深い、正しい知識を得るには、考えたりの、調べたり、また、種々の器械をつかって観察したり、実験したりする。そうして、これをいくどもくり返してたしかめ、す

でに知ったことを材料として、考えをおし進め、種々のことからの関係を明らかにして、きまつた法則を知る。

いいかえれば、ものごとの原因と結果との関係や、その間に行われる法則を知って、ととのつた知識とし、また、さらに進んだ研究をする土台にするのである。たとえば、花のおしべとめしべとの関係についていうと、おしべのかふんがめしべにつかないようなくふうと、いま一つ、よくつくようなくふうをして、その実験を重ね、かふんがめしべにつくときはよくみるのが、つかないときはみのらないことを、知るようなものである。知識が開けず、科学の進まないところには、迷信が行われる。むかしは、星を見て世の中がみだれるといったたり、でんせん病がはやると、ほうき星が出たからだといったたり、あるいは、き

つねがつくとか からの鳴き声が変わるいから不幸があるなど
といった。

今日でも、まだ、そうした考えがのこっている。たとえば、
移轉をするのに、方角がよいとかわるいとかいい、名まえの字
画を数えて、運がよいとかわるいとかきめたり、生まれた年に
よつて、その人の性質や運命をきめたりしている。しかし、よい
といった方角へ移つて困った人もあれば、わるいといった方角
へこして、つごうのよくなった人もある。同じ名まえの人も世
の中には多いが、ある人は、幸福なくらしをし、ある人は、た
いへん不幸になつてゐる。漢字で名まえを書かぬ國の人々など
には、この考えのまつたくあてはまらぬことは、いうまでもない。
日本には、毎年、約二百万人の人が生まれるが、これらの入

がみな同じ性質をもち、同じ運命をたどるとは、考えられない。
このように、道理にあわなことを信ずるのを、迷信という。
一つのことと他のこととの間に、すこしのつながりもなく、原
因と結果との関係もないのに、一つのこととは他のことの原因で
あると、信ずるのである。

原因・結果の関係の簡単なものは、普通の知識によつて知ら
れ、むずかしいものは、科学的研究によつて調べられる。もと
より世の中には、科学的研究によつても、まだ知られていない
ことはたくさんあるが、それは、学者がいろいろに考へて、原
因と結果との関係を調べきわめている。

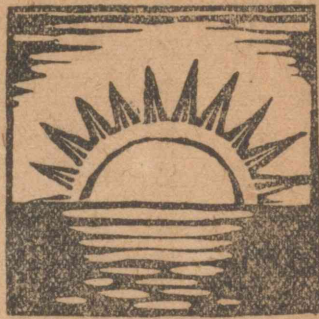
よいことやわるいこと、まつすぐなことや曲がつたことは、
知識をもととして考へなければならぬ。そうして、人は、道

理によって動かなければならぬ。知識によらず道理によらずいたずらに理由のないことを信ずる迷信は、今日、世の中にとれほど害をなしているかしのれない。

知識を廣め、学問を研究して、迷信をまったく取り去ってしまふようになれば、日本の國は、今日よりまだまだ進むことであらう。

ガリレオ

朝になると、日は東の空からのぼり、夕がたになると、西の空にしずみます。月も、東の空から西の空に向かって動きます。地面は平らなもので、日や月が、東から西へまわっているように思われます。



こういふうぶな考えかたがもとになって、東洋でも西洋でも、天は動き、地はじっとしていて動かないという、いわゆる天動説が行われていました。

しかし、この天動説では、どうしてもかたづかないようなことが、目についてきたのです。熱心な学者がだんだんそれを発見しました。

火星や金星・木星などのような星は、太陽のまわりを、大きく輪をえがいて、まわっていることがわかり、また、地球もまるい形をしたもので、火星などと同じように、太陽のまわりをまわっている星の一つだ、ということもわかりました。つまり天動説とは反対に、地動説が出てきました。これを最初にいいた

したのは、十六世紀の中ごろに死んだ、ポーランドのコペルニクスという人です。

しばらくして、ドイツ人でケプラーという人が出ました。この人は、すぐれた数学者で、また熱心な天文学者でした。いつしんに観察したり研究したりして、そういう星——これをわく星といいます——の空にえがく道は、だえん形であって、太陽はその焦点の一つにいるものだ、ということを見ました。そのケプラーと同じころ、イタリアのピサに生まれたガリレオという学者がありました。わかるところからいろいろな発見や発明をしました。自分で望遠鏡を組み立てて、それで天体を観察し、数学でこまかに計算した結果、コペルニクスのいったとおり、天は動くものではない、地球が動くのだということを見

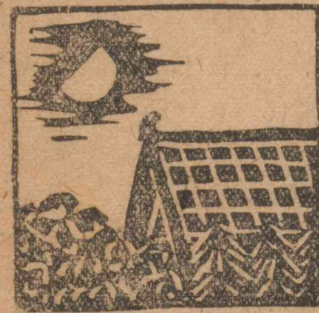
明らかにしました。地は動くといっても、それは一種ではありません。自轉といつて、一晝夜に一どずつ、自分で西から東へ一回轉します。また、公轉といつて、自轉をしながら、だえん形のきまつた輪をえがいて、一年に一回、太陽のまわりをまわります。これで、夜と晝とがあるわけも、春・夏・秋・冬のあ

るわけも、すっかりわかったのです。しかし、そのころの教会のぼうさんたちは、天動説を信じていましたので、ガリレオを呼びだし、その説を人に教えるはならない、といいました。ガリレオも、十三年ばかりは、だまつて研究を続けていましたが、だまつていられず、本を書いて、地動説を強くとなえました。

そのため、ガリレオは、ローマに呼びだされて、自分でも信

じてはならぬ、人にも説いてはならぬ、といわれました。ガリ
レオは、年をとっていてもいたし、めくらにもなりかけていたので、
やむを得ず自分の説はあやまりであつたということにして、ゆ
るしてもらいました。

では、ガリレオは、はく害のため、考えをかえてしまったの
かという、そんなことはありませんでした。やはり地球はま
わる。と信じて、死ぬまで眞理を求めていたのです。



三 みどりの野



デンマークは、みどりの牧場と、もみと、しら
かばの森林と、近海の漁場のほかには、鉦山きやうざんがあ
るのでもなく、いい港があるのでなく、わが九州きゅうしゅうほどの本國
と、三つの島からなっている、小さな、しずかな國であります。
美しいおとぎばなしを、世界の子どもたちにおくつた、アン
デルセンの生まれた國であります。

世界の樂園といわれるこの國も、千八百六十四年に、ドイツ
オーストリア二國との戦いに敗れ、賠償として、シユレスウイ
ヒとホルスタインという、作物のよくてできる二州をとられまし

た。もともとせまい、小さな國ですのに、そのもつともよい土地を失いました。ですから、いかにして、國運をもとどおりにするか、これが、デンマルクの愛國者たちの心をくだいた、もつとも大きな問題でありました。

戦いは敗れ、國はけずられ、國民の意氣はしずみ、その活動はおとろえました。たとえ戦いに敗れても、精神的に敗れない國民こそ、眞にすぐれた國民でしょう。國のおこるかほろびるかは、このときにさだまり、この苦しいときにうちかつことのできる國民だけが、國の建てなおしという大事業をなしとげ、さかえるのであります。

このとき、希望をいだいてたちあがったひとりの軍人がありました。戰場から帰ったダルガスです。かれは、その胸に國運

回復の計画をたて、その顔にほおえみをたたえて、つるぎで失ったものを、すきでとり返そうと決心したのです。

Ⅲ ダルガスは、戦いの間、橋をかけたり、道路をつくったり、みぞをほったりするときに、よく、國土の地質や地味を研究しました。こんどは、のこった土地の大部分をしめるユートランドのあれ地と戦い、これを豊かな土地にしようとする大計画をたてました。ダルガスは、どおりいっぺんの空想家ではありません。かれは、科学者であり、理想を実現する誠意にみちていました。ユートランドは、デンマルクの半分以上もあって、その三分の一以上が、作物のできない土地であります。これをこえた土地とするのが、ダルガスのゆめであります。このゆめを実現するために、ダルガスのとるべき手だては、ただ二つしかあ

りません。その第一は水で、その第二は木でありました。
ユートランドの平野には、八百年あまり前には、よくしげった
森林がありました。しかし、切りとるばかりで手入れをおこたつ
たために、土地は、年を追ってやせおとろえ、ついに、あれは
ててしまったのです。

これを生かすのは、みぞをほって水をそそぎ、平野の雑草を
かりとり、じゃがいもか牧草を植えることにありますが、もつ
ともむずかしいのは、あれ地に木を植えることです。

ダルガスは、このあれ地に育つ木があるかないか、まず、こ
のことについて研究を重ねました。そこで思いついたのは、ノ
ルウエー産のもみの木でありました。これなら、ユートランドの
あれ地にも育つだろうと思つて、実際に試験してみると、もみ

の木ははえるが、数年ならずしてかれてしまいました。ユート
ランドのあれ地は、もはや、この強い木をやしなうにたる地力
さえ、のこしていませんでした。

しかし、ダルガスの誠実は、これがためにくじかれることな
く、「自然は、このむずかしい問題を、かならず解決してくれる
にちがいない。」と、熱心に研究を続けました。そうして、かれ
がふと思ひうかべたのは、アルプス産の小もみを移植してみた
らどうか、ということでありました。これをノルウエー産のも
みの間に植えてみると、両種のもみは、たがいにならんで生長
し、年がたつてもかれないうで、よくしげりました。ユートラン
ドのあれ野には、年ごとに、みどりの野が広がりました。ダル
ガスの希望であり、デンマルクの希望であるこの植林は、みご

とに実現されました。そこで、デンマルクの國運回復の意氣は、年々高まってきました。しかし、問題はまだのこっています。みどりの野はできたが、ユートランドのあれ地から建築用材を求めるダルガスの熱望は、実現されません。もみは、ある大きさまでのびると、そこで生長をとめました。アルプス産の小もみを植えたので、かれるのはふせがれましたが、その生長は、これによつてはたされなかつたのであります。デンマルクの農夫たちは、「ダルガス、おまえがくれるといった材木を、さあ早くもらいたい。」といつて、かれにせまりました。

ダルガスの長男、フレデリック・ダルガスは、父の質を受けて、植物の研究がすきでしたが、かれは、もみの生長について、大きな発見をしました。わかひダルガスは、父に、

「大もみがある大きさ以上に生長しないのは、きつと、小もみをいつまでも、大もみのそばにならべておくからです。もしある時期になつて、小もみを切りはらつてしまつたら、大もみは土地をひとりじめして、生長するにちがいありません。」といいました。

わかひダルガスの意見を、実際にためしてみると、そのとおりになりました。小もみは、ある大きさまでは、大もみの生長をうながす力をもっているが、それをこえると、かえつてさまたげになるといふ、植物学上の事実が、ダルガス親子によつて、発見されたのであります。このおかげで、ユートランドのあれ地には、おいしげつたもみの林が見られるようになりました。

ダルガス親子の発見と努力によつてもたらされた、よい結果

は、木材だけにとどまりません。第一、ユートランドの氣候が、そのよい感化を受けました。しげった木のない土地は、熱しやすくさめやすいから、ダルガスの植林以前は、ユートランドの夏は、晝は暑く、夜はときに、しもさえ見ることがあつたのです。そのころ、ユートランドの農夫のつくった農作物は、じゃがいも・くろむぎ、そのほかわずかのものにすぎませんでした。植林が成功してから以後の農業は、すっかりかわりました。夏、しもがおりののはまったくやみ、こむぎ・さとうだいこんなど、北ヨーロッパ産の農作物で、できないものはないまでになりました。ユートランドのあれ地は、大もみの林がしげったために、こえた田園となりました。木材があたえられたうえに、いい氣候があたえられました。そればかりでなく、しげった林は、海

岸からふき送る砂ほこりをふせぎ、さらに、北海岸特有の砂丘を、海岸近くでくいとめました。

しもは消え、砂は去り、そのうえ、大水の害がのぞかれたので、すたれた都市はふたたびおこり、新しい町村が、いたるところに生まれました。土地のねだんがあがって、あるところでは、百五十ばいになりました。道路・鉄道は、いたるところにしかれました。とうとう、ユートランドは生まれかわりました。戦いによって失われたシユレスウイヒとホルスタインとは、すでにつくなわれて、なおあまりあることになりました。

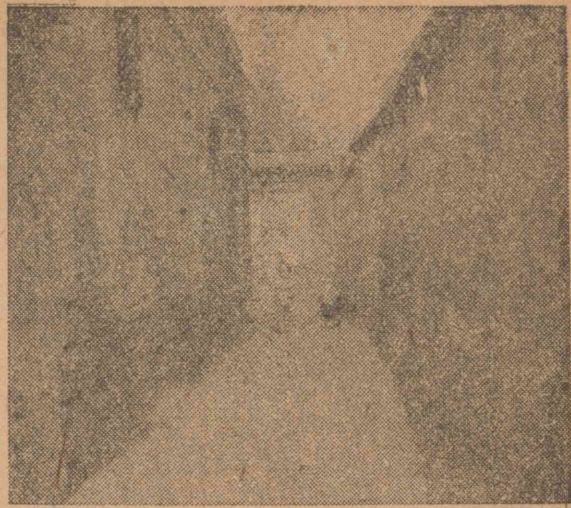
ところが、ここに、木材よりも、農作物よりも、とういものが生き返りました。それは、全國民のたましいでした。デンマルク人のたましいは、ダルガスの研究と実行の結果として、

すっかり生まれかわりました。敗戦のために意氣のおとろえた国民は、希望をとり返し、誠実な研究と、がまん強い実行と、熱誠な共力によつて、あれ地をみどりの野とし、祖國を生き返らせ、ついに、今日のような平和國家をうち建てました。

四 ホートン風景

ペーピンの町には、ホートンが、あみの目のように通じている。ホートンというのは、小路のことである。

どこの家も、高い土べいを立てめぐらしているので、小路はおのずから高い土べい続きになっている。あまり廣くもない道



の両がわの土べいの上から、えんじゅや、やなぎや、ねむのきの枝などが、ずっとのびだしている。それで、ホートンは一本のトンネルのようになつて、どこまでもつながっている感じがする。

一見、なんのかわつたところもないような、このホートンではあ

るが、ここに住んでいる子どもたちにとっては、かけがえのない、楽しい遊び場所であり、なつかしい思い出の天地である。冬は冬で、風あたりの少ないホートンの廣場に、子どもたちがたむろして、日だまりを楽しみ、夏は夏で、ひんやりとした

土べいの日かげを選び、風の通り場で遊んでいる。

遊ぶといつても、べつに、おもちゃや絵本などを持って遊ぶわけではない。そのへんを走ったり、地面にこしをおろして、あなをほったり、土でおだんごのようなものをこしらえたり、遠くの方からひびいてくる、いろいろなものに、耳をかたむけたりしているのである。

もの音には、いろいろなものがある。まず、もの賣りが鳴らして来る鳴りものの音がおもしろい。

床屋が通る。客のこしかける赤いすや、せんめん器や、道具を入れた赤いはこを、てんびんぼうでかついでやって来る。かた手には、大きな毛ぬきのようなものを持ち、かた手には、鉄ぼうをにぎっていて、ときどき、毛ぬきを鉄ぼうでいきおいよく

くしごく。すると、「ビューン」と、あとをひくようなひびきがある。その「ビューン」がとまると、そこでは、どこかの子どもが、もう、頭をつるつるにそられている。

糸屋が来る。荷車をひきながら、ゆっくり歩いて来る。でんでんだいこのような、ブリキのつづみを鳴らしてやって来る。「チャカチャン、チャカチャン」と、かるやかな、はずむような音をたてる。どこからともなく、女の人たちが集まって来て、糸屋さんをとりにまく。黄色や、赤や、白の糸たばがくりひろげられ、にぎやかな話が続く。

いかけ屋が来る。これも、いろいろな道具を入れた荷をかついでいる。前の荷の上に、小さなどらをぶらさげ、その両がわに、ふんどうをつるしておく。歩いて行くと荷がゆれて、しぜ

んにふんどうがどらにあたる。「ポーン」と、かわいらしい音をたてる。

どらにも、大きさまざまあって、音色もちがうし、同じ大きさのどらでも、そのうちかたによって、調子がちがう。「あの音は、おもちゃ屋さんだ」「いまのは、あめ屋さんだ」と、それぞれ



子どもたちにはすぐわかる。その中で、いちばんさわがしくて、大きな音をたててやって来るのは、さるまわしてある。

「ジャン、ジャン、ジャン」と、はげしくたたいておいて、

てのひらで、きゆうにどらをおさえるので、「ジャン、ジャン、ジャン」というように聞える。

これを聞きつけて、子どもが大ぜい集まる。まるで輪になったその中で、さるがさまざまな藝をする。三國志とか、西遊記とかいった、中国のむかしものがたりをやるつもりなのだが、さるは、とちゆうできよんととしてやめてしまったり、とんでもないべつのことを演じたりする。それが、見ている人には、かえっておもしろい。さるまわしは、さるをつかったり、せりふをいったり、はやしをいれたりしなければならぬので、なかなかいそがしい。

鳴りものをつかわないで、呼び声でやって来る者もある。まんじゆう屋がそうだ。朝早く、大きな声で呼びながら、ふれ

歩いて来る、やつと目がさめたころ、遠いところを通るその声を聞くのは、ゆめのの中の声のように思われる。

春は、なえ賣りがやって来る。

夏は、きんぎょ賣りがやって来る。「さあさあ、きんぎょをお買いなさい。大きなきんぎょに小さなきんぎょ。こんなことをいって通る。

アイスクリーム賣りがやって来る。「おいしい、おいしいアイスクリーム。においもさとうも大まけた。」と歌う。

秋には、なつめ賣りがやって来る。ぶどう賣りもやって来る。たとえ、鳴りものであるうと、呼び声であるうと、トンネルのよなホートンには、それが、ふしぎなほどよくひびきわたる。このように、いろいろなもの音がひびくが、なんといつても、

いちばん耳に親しいものは、水を運ぶ一輪車の音であるう。水に不便なペーピンでは、一けん一けん、水を運んで行かなければならない。大きな水おけをのせた一輪車が、キリキリ、リリリリときしみながら、かん高いひびきをたてる。だから、車の動いている間、たえまなく、「キリキリ、リリリリ」がひびく。夏の日には、この音がすずしい氣持をおこさせ、冬の日には、いかにもさむざむとした氣持をおこさせる。

夜のホートンはまっ暗なので、はなをつままれてもわからな
いほどである。それだけに、空が美しい。月が出ていれば、出
ていたで美しく、星の夜であれば、またさらに美しい。青みが
かった明かるい夜空に、なんきんだまのような星がばらまかれ
て、一つ一つがかがやく美しさは、なんといつたらよからう。

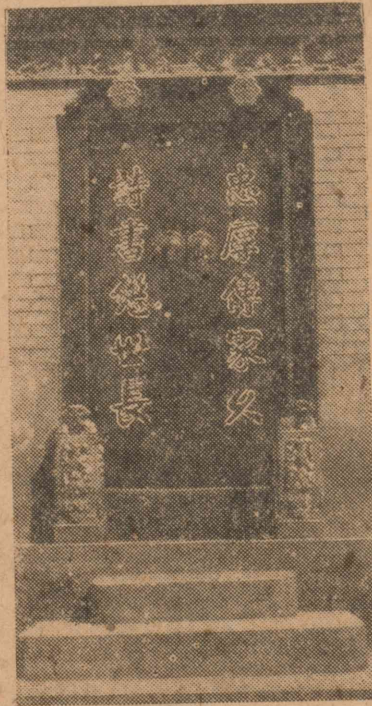


ときには、ホートンの廣場などに、
かけ絵の舞台をこしらえて、そこで、
人形あやつりがはじまる。ほのぼのと
ゆれ動くかけ絵は、子ども心をひき
つけてやまない。夜のふけるのも知ら
ないで、見とれてしまう。ふと気がつ
いて、子どもたちは、あわてて家にも
どって行ったりする。

ホートンに面した家々の門には、れ
んが書かれてある。れんは、めでたい文句や、詩の一節である
が、みな、りっぱな文字で書かれてある。小さな子どもは、絵
も字もわからないころから、ただ美しいかざりのような氣持で、

れんをながめている。それが、だんだん大きくなって、文字であ
ることがわかり、その文字の意味がわかってくると、いっそう、
その美しさが、胸にきざまれる。文字の國といわれるのも、いわ
れの無いことではない。

正月には、門のとびら
に、まっかな紙の春れん
がはりつけられる。子ど
もたちは、そのあざやか
な色どりに、正月氣分を味わう



早春になると、はとぶえが天から鳴ってきて、ホートンに
ぎわわせる。これは、はとにふえをむすびつけてとばすのであ
るが、とぶと、風を受けてそのふえが鳴る。ふえには大小があ

るから、はとがむれになってとんで来ると、ふえの音がおのずから和音をふくみ、それこそ天上の音楽である。中庭のあんずがさいいて、花びらがホートンへちらちらと降ってくるのも、このころである。

やなぎのわたが、どこからともなくたくさん舞ってくる。小さな光ったわたが、土べいのかたすみにたまる。ふわふわとまゝるくなつて、風がふいてくると、ころころとこりがりだす。子どもたちは、それをつかもうとして追いかける。

大通りを、ぶたがぞろぞろと歩いて行く。

あひるが、「ガア、ガア」とさわいで行く。

花よめ行列のラツパの音が、どこかでひびく。子どもたちは、またそちらの方へ走って行く。



五 電 話

人

三
郎

ところ

三郎のうちの二室

右がわのかべに、電話がとりつけてある。左手につくえ

電話のベルが鳴る。だれも出て来ない。一どときれて、また鳴りはじめる。

三郎が、ぼうしをかぶったままとびこんで来て、受話器をとる。

三郎「もしもし………そうです。あ、おばさん。だれかと思つた……

……え、いま学校から帰ったばかり……おかあさん、配給物
を取りに行ったんじゃないでしょうか。げんかんがしまつ
ていたから……はい。え……でも、おばさんだって、このご
ろちつとも来てくださらないじゃないですか。え、え、は
い……そうですか。ほんとう……こんどの日曜ね。(わらって)
いらぬ。ごちそうなんてたくさん。だから、ほんとうにつ
れて行ってくださいよ……ええ、一ど、三年のときだった
が、遠足で行きました……お客さん、ぼくの知っている人
……だれかしら……じらさないで……え、おとうさ
んが、そう……じゃあ、かわってください。(受話器を持っ
たまま、待っている。その間に、ぼうしをぬぎ、指先でくる
くるまわしながら、楽しそうにようす) え、おとうさん。ぼ

く、三郎……はい……え……真ちゃん(まこと)が……マンシユウの真ち
やんが、帰って来たんですか……いつ……え、うちに来た
んですか……へえ……はい……はい。たいへんだったでし
うね……四十日も……手紙が、はい……二番めのひきだし
の……上……はい。(つくえの方をちらちら見る) 今晚……
そうですか。あいたいな、早く……はい、四時ね。おかあ
さんに……はい。早く帰ってくださいね……(わらう)だれか
と思っただんですよ。だって、おばさんたら、お客さんなん
ておっしゃるんだもの……行ってもいいでしょう……はい、
はい。

三郎は、受話器をかけ、電話口から、つくえの方へ走りよ

って、ひきだしをあける。真ちゃんが書きのこしていった手紙を、とりだして読む。読み終ると、また電話口に行き、電話をかける。

二郎「もしもし、五千二十五番ですか。きょう、マンシユウから来た竹田^存さん、おいででしようか。はい、真ちゃん……真^と二を呼んでいただきたいのです……はい。(電話のかかるのを待つている。その間、かた手に持ったさっきの手紙をくり返して読む) はい。はい、あ、真ちゃん。ぼく、三郎……うん……よかったなあ。きょう、うちに来たんだって……うん、うん……でもよかったよ。みんなで心配していた……うん、そう……そうだったね。四十日の旅じゃつかれただろう……うん、読んだ。いまここに持っている。なんべん

もくり返して読んだよ。電話番号が書いてあったもんだから……そう……うん、うん……そんなこと……かまわないよ。ぼくがある。なんでもあるよ。いっしょにつかえはいいよ……うん、氣のどく……そんな……だって、いまどこの家でも二けんぶんも、三けんぶんもの人が、寝どまりしているんだよ。ぼくの学用品を、ぼくひとりでつかうのは、ぜいたくというもんだ。それに、うちはやけなかつたから、本だっただくさんある。いっしょに読もう。ああ、リックサックも二つある。そうだ。おばさんがね、こんどの日曜、きみをお客さんにして、バイキングにつれて行くって……ねえ……(わらって) いっしょに帰ったばかりだから、お客さんさ……うん、うん、それで今晚来るんだらう。六

時ごろ……もつと早くおいでよ。話がうんとある。見せた
いものだって……なにを……それきみにくれたの……マン
シユウの子どもが。しんせつだね……え、ぼくに……い
らないよ。せつかくの記念品だから、とっておいたほうが
いいよ……うん、うん……そう、二つあるのならもうよ
……うん……へえ……そんなにしんせつだったの。手紙が
だせるようになったら、いっしょに、そのマンシユウの子
どもに、お礼の手紙を書こうね……うん、おみやげより、
早くきみの顔が見たいよ。きょうはとまるだろう……うん、
楽しみにしているよ……おじさんやおばさんによるしく、
さようなら。(受話器をおく)

また、手紙を読みながら、舞台のまん中に出て来る。

三郎 手紙を読みながら、「生きて帰って来ました——か。(顔をあ
けて、そのことばを味わうように)生きて帰って来ました……」

しばらくして、うらの方で、もの音がする。三郎、それに
気がついて、

三郎「おかあさん、おかあさんなの……(と、うら手に行く……声
だけ続く)おかあさん、真ちゃんが帰って来たんだってね。
よかったね。よかったなあ……」

三郎の声が終るころ、しずかにまく。

この「子どもしばい」を

するための注意

しばいは、かならず、ふたり以上の会話から組み立てられて
います。ところが、このしばいは、舞台に出て来る人が、ただ
ひとりです。それでは、これはしばいではないかというところ
うではなく、これでも、しばいになっています。ただ、あいて
になる人が、見物人の目につかないだけです。そうでしょう。
電話のはじめの人は、三郎くんのおばさん、それからおとうさ
ん、そのあとはマンジウウから帰って来た真二くん、おしま
いにおかあさん。ですから、舞台に出ている人は、四人の人と話
をしてゐるわけです。

ところが、この四人の声は、見ている人には聞えません。そこ

で、三郎くんの声と動きだけで、四人とそれぞれ話をしてゐる
ようすを、見せなくてはなりません。そこに、このしばいのむ
ずかしさがあります。三郎くんのことばの間に、あいてがな
かいつているわけです。ですから、文字にあらわれていないあ
いてのことばを考えて、それによつて、「……」を時間的に短くし
たり長くしたりして、電話の話らしくしなければなりません。
あいてのいうことを聞いて、それから三郎くんのことばをい
い、そうして、三郎くんのことばだけで、すっかりようすがわ
かるように、くふうします。

見物人にせなかを向けられないように、顔の表情がよく見えるよ
うにすることも、たいせつなことです。

六 そよ風

土

ありが、

ちようの羽をひいて行く。

ああ、

ヨットのようだ。



チューリップ

はちの羽音が、



チューリップの花に消える。

そよ風の中にひっそりと、

客をむかえた赤いへや。

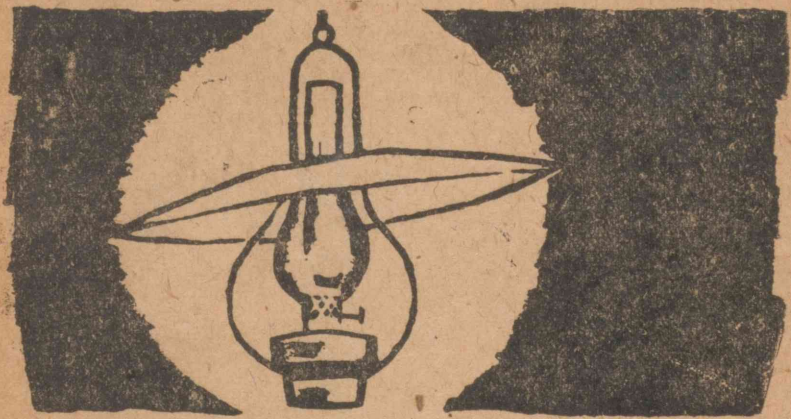
しか

午前の森に、しかがすわっている。

そのせなかにその角のかけ。

あぶが一びきとんで来る。

はるかな谷川を聞いているその耳もとに。



きり

山の湖水のほとり、
「ます」小屋のランプが、
きゆうに暗くなりました。

短日

かれぎくをたいている。
とやへ追われて行く、
白いレグホンたち。



わらいの歌

みどりの森が、喜びの声でわらい、
波だつ小川が、わらいながら走っていく。
空気が、わたしたちのゆかいなじょうだんでわらい、
みどりの丘が、その声でわらいます。

牧場が、生き生きしたみどりであらい、
きりぎりすが、楽しい景色の中であらい、
メアリとスーサンとエミリとが、
かわいい口をまるくして、ハ・ハ・ハイとわらい。

わたしたちが、さくらんぼと、くるみのごちそうをならべると、
その木のかげで、きれいな鳥がわらっている。
さあ、元気でゆかいに、手をつなぎましょう。
うれしいハ・ハ・ハイを、合唱しましょう。



牧場

牧場の泉を、そうじに行つて来るよ。
ちよつと落ち葉をかきのけるだけだ。
でも、水がすむまで見ているかもしれない。
すぐ帰つて来るんだから、きみも来たまえ。

子うしをつかまえに行つて来るよ。
母うしのそばに立ってるんだが、
まだあかんぼうで、母うしがしたでなめると、よろけるんだ
よ。
すぐ帰つて来るんだから、きみも来たまえ。



わたしの心はにじを見る
とおどる

わたしの心は、にじを見るとおどる。
おさないころにそうだった。

おとなになつてゐる、いまもそうだ。
 やがて老いても、そのように。
 そうでなければ、死んでいたい。
 おさな子はおとなの父だ。
 それで、わたしは望ましい、
 わたしの日々が、
 自然をしたう心で、
 一日一日と、むすばれていくように。



七 ある画像

もとの先生から、一まいの絵はがきをいただきました。絵は、
 はがきの上の方に、まるく原色ですつてあります。まだわかい、
 美しいおかあさんが、まるまるどふとつたかわいいあかちゃん
 をだいていて、その右の方に、もうひとりの子どもがよりかかっ
 ている絵です。



その下の白いところに、先生の手で、
 こう書いてありました。
 「これは、いまから五百年ほど前に、
 イタリアのラファエルという画家の

かいたもので、「いすによるマドンナ」といわれています。これを見て、どう思いますが。

ぼくは、その絵を見ると、そのあかちゃんがキリストで、そのおかあさんがマリアだということは、すぐにわかりました。そうして、その絵がだいすきになりました。

その氣持を、だれかに話してみたくてたまらなくなりました。それで、すぐに、おとなりのおじさんのところへ行きました。おじさんは、絵かきではありませんが、絵がすきで、それに、わかいころ、世界をまわって来た人です。だから、この絵も、本物をごらんになっているだろうと、思ったからです。

ちようど、おじさんは、用事がなく、しよさいで、本を読んでいたらしやいました。

「ああ、よく来たね。なにかおもしろいことでもあるのか。そういって、喜んでむかえてくださったので、先生からいたた

いた絵はがきをだして見せますと、それなら、もうすこし大きいのがあるよ。」

どいって、一まいの絵をひきだしからだして、見せてくださいました。

ぼくは、絵はがきをそのすりものどくらべてみると、ずいぶんちがっているのにおどろきました。絵はがきでも、たいへ



んいい絵だなと思いましたが、おじさんので見ると、いっそう生き生きとして、その着物やはだの色の美しいのにおどろかされました。

「それでも、本物にくらべたら、やっぱり、月と太陽みたいにちがうといってもいいな。」

「そんなにちがうのですか、おじさん。」

「本物はね、いま、イタリアのプロレンスという町の絵画館にかざってあるよ。ラファエルは、ウルビノというところで生まれ、早くから絵のけいこをして、たいへんじょうずであった。が、そのころ、レオナルド・ダ・ビンチだの、ミケランジェロだのという天才の集まっていた、美術の中心のプロレンスで、研究しているうちに、たいそう上達したのさ。」

ミケランジェロとラファエルは、前後して、そこからローマに出て、へき画をかいいたり、美しいしゅう像などを、たくさんかいた。中でも、ラファエルは、マドンナの像をかくことが得意だった。その「いすによるマドンナ」は、おけのそこにかいたという小さな絵だが、じつによくかけている。

おじさんは、そういいながら、目を細くして、ありありとその絵を目の前に見るようなようすをなさいました。

「ぼくには、よくわかりませんが、そのマリアは、たいへん美しくて、いかにもおかあさんらしいと思うのです。」

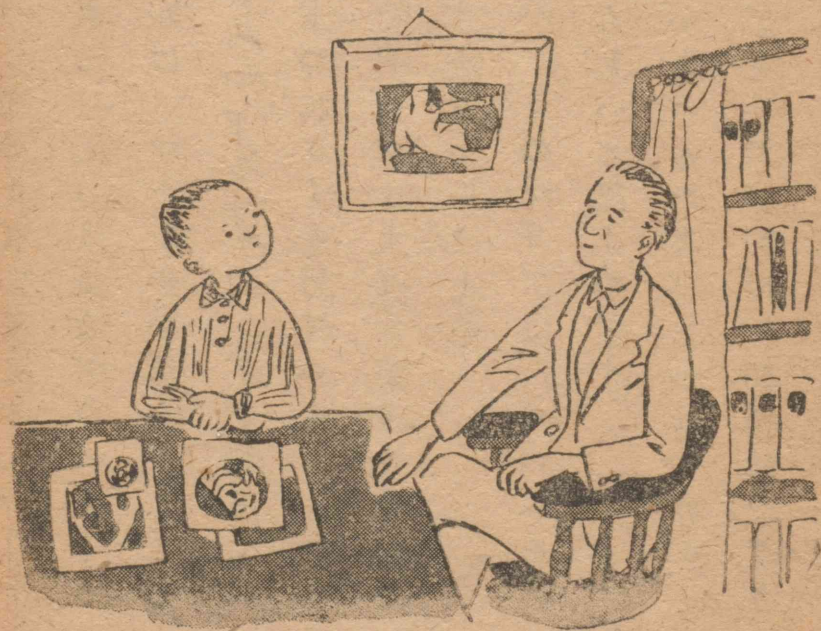
「そう思うかね。いかにも、おかあさんの喜びという心持が、よく出ているね。絵は、写真で見ただけでは、明暗はかなりわかるが、色がわからない。赤いところが黒くなったりする

ので、どうもよくない。色の
あるのは、その点はよいが、
すりがうまいかないから、
また困る。」

「じゃあ、やっぱり、おじさんみ
たいに、旅行して来なくちゃ
だめですね。」

「まあ、そうだね。それはそう
として、ラファエルのかいた
マドンナのかわったのを見せ
てあげよう。」

おじさんはそりいって、同じ



「ひきだしから、一まいえらびだして、見せてくださいました。」

「これは、ドレスデンの美術館にある絵で、『シストのマドンナ』
といわれている。これはどう思いかね。」

それは、せいの高いマリアがキリストをだいて立っているど、
老人のぼうさんらしい人が、その前にひれふしている絵でした。

「その絵は、たいへん感じがちがいますね、おじさん。なんて
いうか、ただのおかあさんではなくて、キリストのおかあさ
んという感じが、よく出ているんじゃないでしょうか。」

「ふふん、そう思いかい。きちんとした、おごそかな感じがす
るね。この絵は、たいへん大きなりっぱな絵だよ。わたしが
行ったとき、この絵の前には、一台の長いすがおいてあった
が、見物の人が、かわりばんこにやって来て、あいていると

「きがなかつたよ。
ぼくは、それを
聞きながら、目を
あげて、かべにか
かっている一まい
の絵を見ました。」

「あれも、西洋の
名画でしよう。」

ぼくには、その

うまさがよくわからないけれど。」

「ああ、あれか。あれは、ミケランジェロのかいた、てんじよ
う画の一部だ。くらべてみて、うまさからいうと、ラファエ



ルのほうがうまいかもしれないが、深みやしんけんさは、ど
うだろう。でも、ラファエルのうまさは、普通の人にもわか
るだろうね。なんといつても、二十二か三のわかさで、せん
ぱいをしのいで大家になり、自由にふてをふるって、りっぱ



な作品をたくさんのこしたのはえ
らいよ。こんなことを考えて、き
みも勉強を続けるんだね。きつと
先生も、そんなお氣持で、この絵
はがきを送ってくださったんだろ
う。

國語 第六学年上
 Approved by Ministry of Education
 (Date Nov. 17, 1947)

(昭和二十三年度用第一次発行)

昭和二十二年三月十一日翻刻発行
 昭和二十三年一月六日修正印刷
 昭和二十三年一月二十日修正発行
 (昭和二十二年十一月十七日 文部監検査済)

著作権所有

著作兼発行者

文

部

省

兼印刷者

東京都北区堀船町一丁目八五七番地
 東京書籍株式会社

代表者 長 得 一

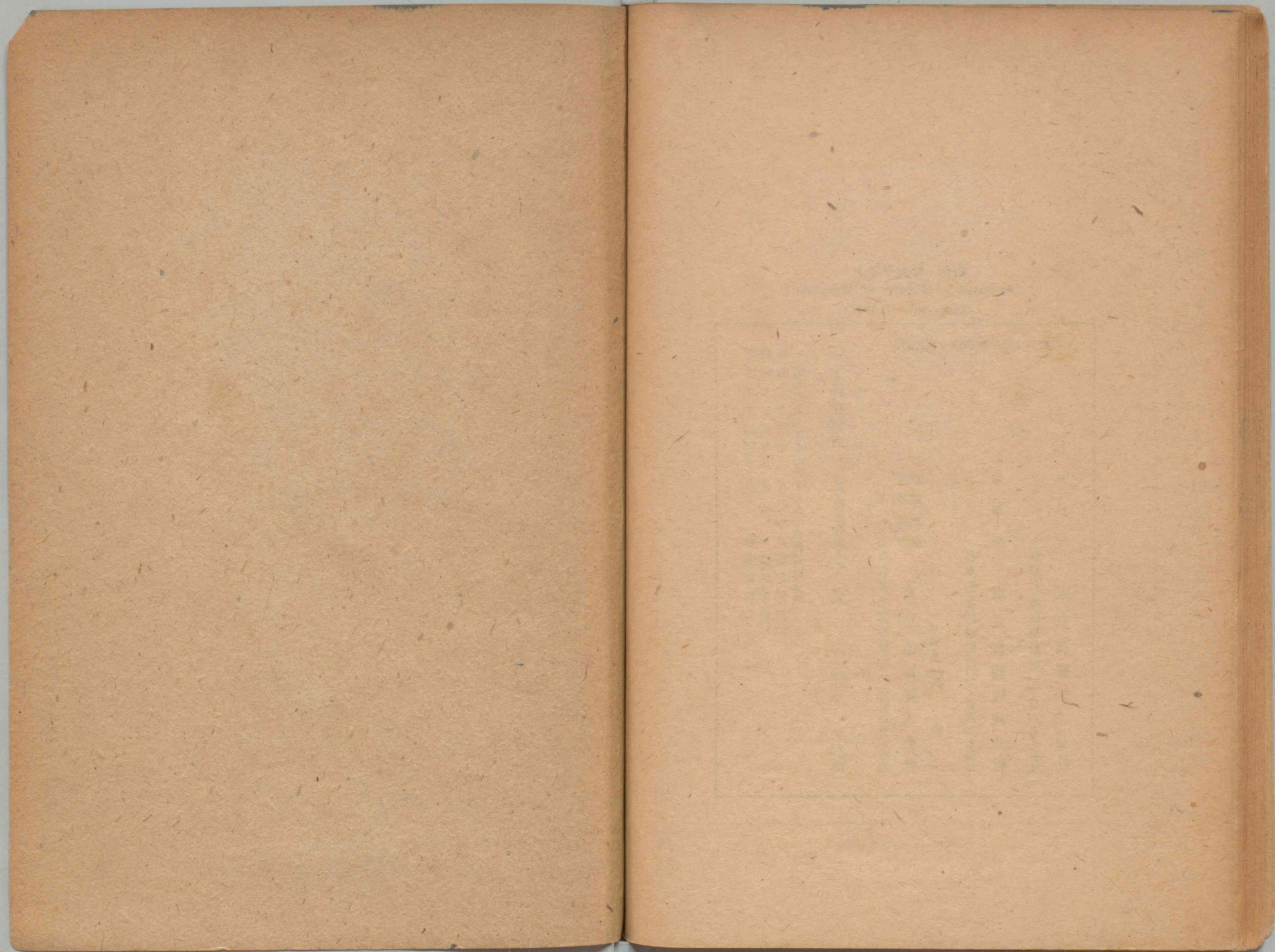
印刷所

東京都北区堀船町一丁目八五七番地
 東京書籍株式会社

発行所

東京都北区堀船町一丁目八五七番地
 東京書籍株式会社

市 (25)	償 (17)	焦 (14)	結 (9)	識 (8)
句 (34)	精 (18)	公 (15)	果 (9)	迷 (8)
給 (38)	軍 (18)	牧 (17)	漢 (10)	淺 (8)
番 (39)	復 (19)	鉦 (17)	他 (11)	関 (9)
像 (53)	期 (23)	州 (17)	反 (13)	係 (9)
達 (56)	努 (23)	賠 (17)	紀 (14)	則 (9)



広島大学図書

0130449571

